北日本新聞八月十日二十八面の「立き友思い折り鶴千万羽」の記事を読んで

高岡市立伏木中学校　三年　坂野上　涼子

私は最近まで戦争について関心がなかった。

戦酷な歴史に触れたくないという思いや、自分には関係のないことだと感じていたからだ。しかし、歴史の授業で戦争について学ぶうちに「なぜ罪のない人々まで戦争に巻き込んだのか。」とか「戦争をもっと早く終わらせることはできなかったのか。」と自分の意見を持つようになった。そのとき私は悲惨な過去を知ることは平和な未来を創ることにつながるのだと知った。そこで、自分の住む地域や先祖はどのように戦争に関わったのか調べた。祖父や祖母に「この近所に戦争の痕跡はないか。」と尋ねると、「すぐそこの空き地に防空壕が残っているよ。」と返ってきた。私は驚いた。防空壕は広島や長崎、東京など、戦争で大きな被害が出たところにしかないと思っていたし、終戦から七十年も経った今、す

20×20

っかりなくなっていると思っていたからだ。

先祖と戦争の関わりについて、戦争当時、私の祖父は幼く、祖母は生まれていなかったため、共に戦時中のことはあまり記憶していないと言っていた。しかし、祖母の父親は徴兵され、戦地で腹部に銃砲の弾を受けた。その弾は戦争から帰ってきた後もずっと残っていたそうだ。自分の曾祖父が「命のバトン」をつないでくれたことに感謝したいと思った。

しかし、この記事を読み、戦争で生き残った人々が「自分がはきている」ことに対して幸せばかりを感じているわけではないことを知った。長崎で十六歳のときに被爆した岩本さんは、その日、爆心地から一・一キロメートル離れた兵器製作所の工場の二階で働いていると、窓の外がピカッと光った後、ガラスが一斉に割れ、熱風に襲われた。岩本さんの右のほおと首筋などにガラス片が食い込み、ハンカチと服が真っ赤に染まった。私はここまで読んだだけでも心臓がどきどきして汗が

止まらなかった。戦後、岩本さんは同じ工場で働いていた亡き友人の父親に会い、「あなたは帰って来られてよかったね」と言われ、涙が止まらなかったそうだ。二十五歳で結婚し、三人の娘に恵まれ、幸せな人生と思うたび、「生かされている」という思いと、亡くなった友人に、自分だけが生き残ったことを申し訳なく思う気持ちが入り交じる。今も。

戦争を知らない私達の中では、戦争は始まらずして終わっている。しかし、戦争を経験した人々の心の中では、まだ戦争は終わっていないと思う。岩本さんは現在、八十六歳。亡き友人を思い、十年間で作った折り鶴は約千四万羽。被爆者の心の傷は折り鶴を何万羽、いや何千万羽作っても癒えることのない深いものだ。その深い悲しみを風化させないためにも、私達は後世に戦争の歴史を伝えていく義務がある。そして、後世の人々も平和を愛し、守り抜く義務がある。